

八尾・よろず考古通信



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年 2 回発行

平成 23 年度の主な発掘成果から

平成 23 年度に市域で実施した埋蔵文化財発掘調査では多くの成果がありました。

市南部に位置する弓削遺跡の調査では、弥生時代中期後半～後期(前 1～2 世紀)の居住域を構成した遺構が見つかりました。中田遺跡では、弥生時代後期(2 世紀)の墓域が見つかり、方形周溝墓と大形壺を使用した土器棺墓を検出しました。東郷遺跡では、古墳時代前期前半(3 世紀後半)の居住域が東郷遺跡の西部に存在したことが明らかになりました。跡部遺跡では、古墳時代中期の土器集積が見つかりました。

平成23年度 の主な 発掘調査地点



この地点は古墳時代中期後半～古墳時代後期にかけて、当時の政治の中心的な役割を果たした物部氏の本拠地にあたることから、古墳時代中期後半の動向を知るうえで重要な資料と言えます。

弥生時代中期の大集落の中心部を掘る！

弓削遺跡<第 17 次調査>(志紀町南三丁目)

志紀町南三丁目の調査で、弥生時代中期後半～後期前半(前 1～2 C)を中心とした集落跡が見つかりました。

弓削遺跡は弥生時代の中期後半～後期を通じて、古大和川左岸一帯を中心に集落域が拡大したことがこれまでの調査で明らかにされています。

弥生時代中期の集落は、弥生時代中期後半(前 1 C)に成立し、比較的短期間に拡大したようで、その規模は東西約 350m、南北約 550mにおよびます。弥生時代後期においても安定した集落が継続して営まれており、その規模は弥生時代中期よりやや広い規模で推移したことが推定されます。

今回の調査では、特に弥生時代中期後半を中心とする数多くの遺構・遺物が見つかり、調査地点が当時のムラの中心部であったことが推定されます。



弥生時代中期後半～後期前半のムラ跡

目次 ◆平成 23 年度の主な発掘成果から(1～3) ◆考古学よろずコラム 庄内式土器について(4)
◆イベント案内/編集後記(4)

弥生時代後期の墓域を新たに発見！

方形周溝墓と土器棺墓が見つかる

中田遺跡<第53次調査> (刑部四丁目)^{おさかべ}

刑部四丁目の調査で、弥生時代後期後半(2C)の墓域が見つかりました。弥生時代後期(2C)の墓域では、方形周溝墓とその周溝内から土器棺墓1基が見つかりました。

土器棺墓は、口頸部を欠いた大形壺(体部最大径約70cm)が使用されており、径1.0m・深さ0.5mの掘方内に南側に傾けて埋められていました。

なお、北約100m地点では、弥生時代後期の大形器台が発見されており、それらを所有した集落に関わる墓域であった可能性が考えられます。



土器棺に使用された大形壺
(弥生時代後期後半)



弥生時代後期後半の方形周溝墓の
周溝内から見つかった土器棺墓

邪馬台国時代のムラ跡を新たに発見！

東郷遺跡<第74次調査> (北本町二丁目)

東郷遺跡西部の北本町二丁目地内の調査で、弥生時代後期(2C)、古墳時代初頭～前期前半(3C)の集落跡が見つかりました。

これまでの調査で、遺跡範囲のほぼ中央部付近を南北方向に流れる弥生時代前期～後期前半(前3～1C後半)の河川(東郷分流路)が見つっています。東郷遺跡の邪馬台国時代の集落は、東郷分流路により形成された自然堤防上に居住域が設けられ、河川跡のやや低い部分には生産域である水田や墓域が設けられています。特に、古墳時代初頭～前期(3C)にかけては、集落域の拡大傾向に符合して、他地域との交流が推定される外来系土器の増加がみられます。このことから、東郷遺跡は邪馬台国時代において中河内地域の中心的な役割を果たした遺跡の一つと考えられます。



古墳時代前期前半のムラ跡

東郷分流路と古墳時代初頭の集落について

これまでの調査で、東郷遺跡範囲のほぼ中央部付近を南北方向に流れる弥生時代前期～後期前半(前3～1C後半)の河川が見つっています。東郷分流路と名付けられたこの河川は、川幅が約150mを測る大規模な河川ですが、徐々に川幅を狭め、弥生時代後期前半(1C後半)には機能を停止したものと推定されます。東郷遺跡周辺の古墳時代初頭～前期(3C前～4C後半)の遺跡では、この河川跡の微地形を巧みに利用したムラづくりが行われていたことが、これまでの調査成果で示されています。

古墳時代前期のムラ跡を発見！

亀井遺跡<第16次調査>(亀井町一丁目)

亀井遺跡東部の亀井町一丁目地内で、弥生時代中期(前2～前1C)の遺物包含層、古墳時代前期前半(3C後半)の井戸などの集落跡が見つかりました。

亀井遺跡は、弥生時代の全時期を通じて地域の拠点となる大規模な環濠集落であったことが、これまでの調査で明らかにされています。

今回の調査では、弥生時代中期と古墳時代前期前半の居住域が発見されました。なかでも、古墳時代前期前半の居住域の発見は、弥生時代後期以降の亀井遺跡の推移を考えるうえで重要です。



古墳時代前期前半の素掘り井戸

古墳時代中期の埋没古墳を発見！

中田遺跡<第52次調査>(八尾木北二丁目)

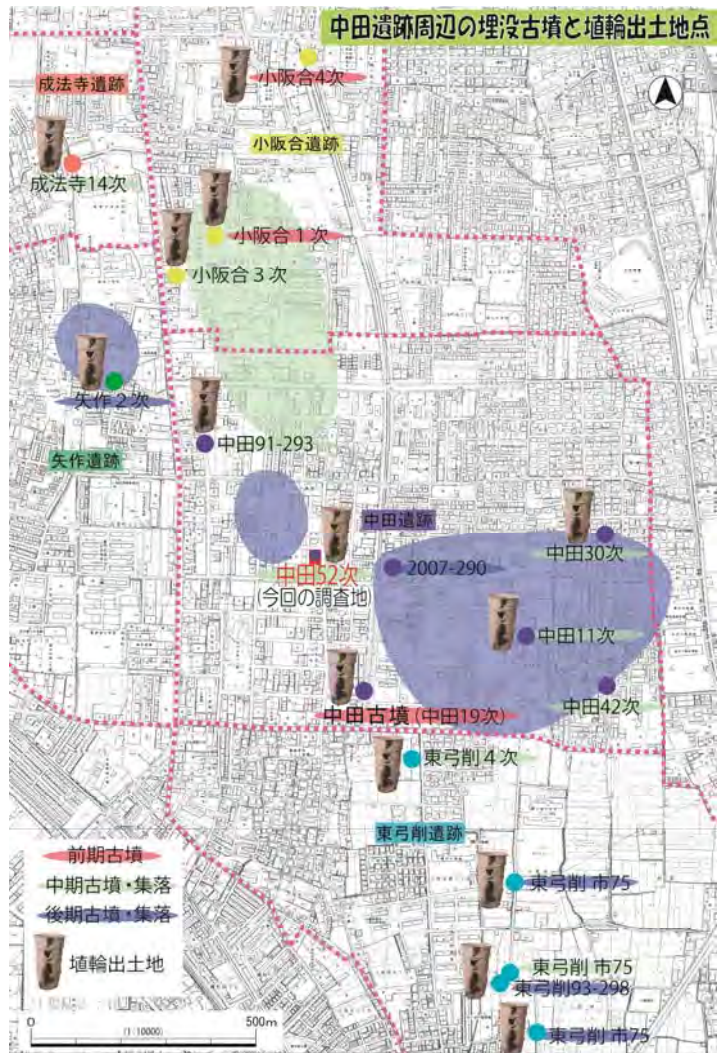
中田遺跡中西部の八尾木北二丁目地内の調査で、古墳時代前期前半(3C後)の遺物包含層、古墳時代中期(5C)の古墳などが見つかりました。

中田遺跡は八尾市の中央部に位置する弥生時代前期(前4C)以降の複合遺跡です。昭和40年代後半に行われた区画整理事業に伴う調査で遺跡として認識されました。特に、古墳時代初頭～後期(3C～6C)の集落が広範囲にわたって見つかりました。

今回の調査地である八尾木北二・三丁目一帯では、古墳時代中期(5C)～後期(6C)の集落をはじめ、中田古墳〔円墳(4C後半)〕などの埋没古墳が随所で発見され数多くの埴輪類が見つかりました。



古墳の周溝と推定される落ち込みが見つかったようす



調査地周辺の前期～後期の集落推定範囲と埋没古墳および埴輪出土位置

庄内式土器について

大阪府豊中市の庄内遺跡から発見された土器を標識とする「庄内式土器」は、古墳時代初頭にみられる土器様式で、その存続期間は土器編年や年輪年代測定法等から概ね 200～270 年前後の数十年間と推定されています。なかでもこの土器様式を代表する「庄内式甕」は、畿内の弥生時代後期の製作技法である外面タタキ技法と吉備地方の内面ケズリ技法とが融合して成立したものと考えられます。

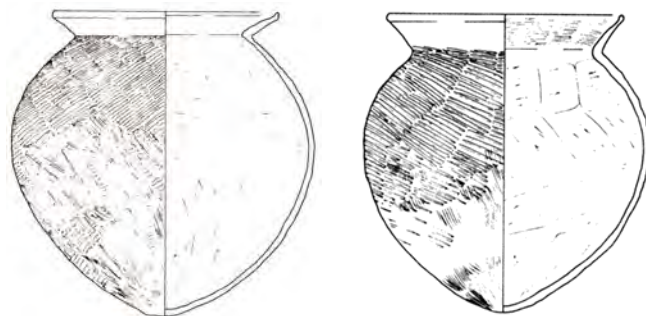
「庄内式甕」には、河内平野を中心とする「河内型庄内式甕」と大和盆地南東部を中心とする「大和型庄内式甕」があります。共に体部内面にヘラケズリ技法を行うことにより薄手丸底を志向するものですが、体部外面のタタキ方向等での相違が認められています。

「河内型庄内式甕」は庄内式期後半(3世紀中頃)に大量に生産され西日本の各地に流通しており、これらに影響を受けた在地系の庄内式甕が播磨地域や北九州の筑前地域で成立しています。

庄内式甕以外の土器組成では、直口壺・庄内系高杯・有段高杯の成立、小形器台・小形丸底土器を中心とする小形器種の増加、壺類の加飾化が見られます。



八尾市出土の庄内式土器



河内型庄内式甕(左)と大和型庄内式甕(右)の実測図
東弓削遺跡<第4次調査-S D1>
〔庄内式古相-古墳時代初頭(3世紀前半)〕

編集後記

考古学を生業とし、発掘調査に携わるものにとって、日々や週単位の気候変化は常に気がかりなものである。歴史盛衰の諸要因としても、自然環境の変化は避けては通れない大きな問題の一つでもある。

今夏も連日の酷暑、熱帯地帯かと思うが如きのゲリラ豪雨、勢力を増す大型台風の襲来、頻発する竜巻の恐怖 etc.

地球環境のサイクルから見れば、取るに足りない僅か一瞬の出来事であるが現代に生きる我々にとっては切実である。

今、この愛すべき惑星を「荒ぶる地球」に変えた人類は猛省と適切な処置を講じる時期に直面している。〈MH〉

イベント情報

- ◆平成 24 年度秋季企画展
「やおの弥生時代Ⅱ—弥生時代から邪馬台国時代へ—」
期間:平成 24 年 10 月 3 日(水)～平成 25 年 2 月 22 日(金)
時間:午前 9 時～午後 5 時、入館無料
休館日:土、日、祝日、年末年始(12 月 29 日～1 月 6 日)
- ◆講演会
「倭国大乱から邪馬台国時代の八尾」
講師:原田昌則<(公財)八尾市文化財調査研究会技師>
日時:平成 25 年 1 月 27 日(日)午後 1 時 30 分～(先着 30 名)
場所:八尾市立埋蔵文化財調査センター



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 『八尾・よろず考古通信 第7号』

発行:2012年10月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター
(編集:公益財団法人八尾市文化財調査研究会)
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目 58-2
TEL・FAX 072-994-4700

URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun, E-mail: maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp